試験される作者・読者・学問

―横光利一「博士」試論―

中川智寛

横光利一「博士」（昭和九年一月、「文芸春秋」）は、これまで、あまりにも看過されてきた作品である。その小説の内部に、横光の文学観を巡る問題系が横溢しているのにも関わらず、である。[1]

本稿で取り上げるこの「博士」は、横光利一の小説技法変革意識、所謂読者参与型作品の範型を確立する意識などを、「私」（松山）[2]という作家を語りの主体に据える事によって極めて象徴的に描こうとしたものであり、そこには、作者と読者との関係性、また、種々の学問領域の至当性をも重層的に問い掛けようとした企図が見られるというのが、一応の結論である。そこには、「純粋小説論」（昭和十年四月、「改造」）の部分的実践意図がある事は言うまでもなかろうが、ある種のアカデミズム批判めいた試みまでもが含まれていたと考えられる。

横光の作品系列から言えば、「博士」というタイトルからは、「紋章」（昭和九年一～九月、「改造」）の山下清一郎などが想起されるであろうが、「紋章」についてはこれまでに多々論じられて来ているので、本稿においては、「博士」の丹念な読解を本旨としつつ、前記問題系の解明に重点を置く。

I

「昨日今日」という「私」（松山）の作品に関し、悪評の嵐に反して加羅木由造博士のみが賛辞の手紙を送る所から、物語は展開する。「昨日今日」という作品のプロットは明らかにされていないが、「冒険こそしてみた作ではあるが、あまりに潑溂とし過ぎてゐて不快に思ってゐた」、あるいは、「特にその作中に現れる人物の意識の運動といふことに関して一番重きを置いて書いたもの」などの記述から、横光の「機械」（昭和五年九月、「改造」）を想起する読者は多いかも知れないが、「悪罵」一辺倒の評価という点で、「機械」とは照応しない。

寧ろ、大切な事は、小説内に文学、あるいは文芸批評を巡る話題が導入される事により、実際に「博士」を読んでいる者と作者横光との関係が複層性を帯び、相対化されているという形式そのものであろう。この様な手法を用い、「昨日今日」に相当する実際の作品や加羅木博士のモデルを横光周辺の人物に求めようとする読者の姿勢それ自体が、如実に焙り出される事になる。

この時期の他の横光作品には、〈四人称〉的な語り手が多く登場する。「盛装」（昭和十年一～十一月、「婦人公論」）、「紋章」など、程度問題の差はあれ、また、〈四人称〉以外には「超越的視点」など、読み手によって用語の差異はあれ、一般的な語り手とは異なる話者が現れる作品が多い。それらに対し、この「博士」においては、ほぼ一貫して一人称の「私」が語りを展開して行く事により、読者側は、他作品における様な迷いを受けなくて済む。その代わり、先述の問題性などを考えなければならないという「宿題」を作者から与えられているのである。実際、作中に次の様な記述がある。

私に限らず、一般の作家といふものにはいろいろと共通の癖があるものだが、中でも自身の作を読む人々の頭脳の感得力を、絶えず試験してみたがる癖は一番大きな共通のものであらうと思ふ。（傍点中川）

この文章は、「博士」一篇のみならず、横光の読者参与意識を探る上で、頗る重要なものである。評論ではなく、実作においてこの様なメッセージが発せられている事を、我々は重く受け止めなければならない。これは、単に小説の読み方に留まらず、野中潤[3]が言う所の「小説内クイズ」の問題とも通底するものであり、読者側の人文諸科学の基礎知識、あるいは探究意識をテストしようとするものである。稿者は、横光が実際にその種の試みを「機械」以外にも行っていたと考えている。この問題の解明については他日を期したいが、ここで留目しなければならないのは、その「試験」する意識が、作中の語り手である「私」にも向けられている点である。先の引用部に続き、以下の様に述べられる。

私としても、創作は一つの精神科学と思ってゐる以上、自身の作物といふ一個の新しい世界が、人々の感性や智性に与へる影響といふことについては、誰にも負けずに考へてゐたので、したがつて、このときの私の「昨日今日」に加へられた多くの悪罵や、加羅木博士の賞讃なども、一つ一つ私にとっては有力な心理試験となってゐるのであつたから、自然にそのときから、私には加羅木博士の頭脳の素質が心に浮んで来る習慣となつて来たのである。（傍点中川）

各登場人物のモデル措定が困難である以上、作中の「私」と作者横光とを安易に重ね合わせて考える事は、無論出来難い。しかし、語り手である「私」が、「試験」される意識の強い自覚を訴える事により、読者の感覚に、作者横光の存在性と「私」の造型とが二重映しになる仕掛けとなっている。

あるいは、「昨日今日」のプロットに関する記述を意図的に隠蔽化し、「機械」などを想起させつつも読者をそこから揺り戻し、作家の伝記的事実と作中事実とを関連付ける事の自明性を読者に問う試みがなされているものとも読めるのである。この作品は、語り手の「私」が「試験」されている一方、小説の読者が試されている側面も持ち、そして、その様な実験的小説を執筆する横光利一自身がその有効性を自問するという、言わば「試験」の重層体を呈した作品であると定位

出来よう。

Ⅱ

金槙薫の指摘[4]にもある様に、作中において文学と自然科学との拮抗が表徴化されている点を忽せにしてはならない。殊に、横光利一は、小説に自然科学の記述を導入する試みを多く行っている事を注視しておく必要があろう。「園」（大正十四年四月、「文芸時代」）におけるボイルの法則の数式の記述、「機械」に現れる「重クロム酸アンモニア」などの薬品名、「紋章」の醤油醸造の話題、そして、「旅愁」（昭和十二年四月～二十一年四月、「東京日日新聞」、「大阪毎日新聞」、「文芸春秋」、他）における神社の幣白とヒルベルト空間とを接続する論理など、横光は、文学と自然科学との関係性を作中で追究し続けた特異な作家であると言える。「博士」にも、「コカイン」、「阿片」などの薬品名が現れる。しかし、この「博士」においては、その問題を追う作家の姿勢が、極めて象徴的なスタイルを取っている点に特徴がある。

作品のタイトルとして選ばれている加羅木博士は、「医者としての学位をとってしまってから、ある私立大学の文科に学生として入学した」人物として描出されており、加羅木一人の内部に、文系と理系、文学と科学の両方が混在する形が取られている。加羅木博士の存在性は、文学と自然科学の双方の融和の可能性と不可能性とを同時表徴していると言えるだろう。

事実、加羅木の内実は裂開に満ちている。医界で「新聞人を利用して広告させた」初めての人物である程のやり手でありながら、他人の秘密を一度知ると、それを暴露せずにはおれない性質であるという事を自ら告白する。この、他人と秘密を共有する事が全く出来ないという博士の特性は、「機械」に登場するネームプレート工場の主人の、金銭の管理が全く出来ず、いつも金を落としてしまうという習性と相通ずるものである。

しかし、見方を少し変えると、博士の点出は、全くの愚物として展開されているという訳でもなさそうである。他人の秘密を維持するという事は、その秘密を持つ人物に多少なりとも与する事を意味する。金銭に執着するという事も、自らの保身・栄達を多く意味しているものであり、そう考えると、「博士」の加羅木由造も、いかなる思考枠にも依存・迎合せず、優れてリトマス試験紙的特性を付与されているものと解読出来る。それが、「丸坊主」という風貌、あるいは、「何人にも自身の秘密を隠そうとしなかった天真な美しさ」といった描写に象徴化されている。

作中の加羅木由造の位置付けと類似している人物は、他の横光作品にも登場する。「博士」単独の研究は皆無に近い状況[5]であるので、「機械」の主人、「寝園」（昭和五年十一月～七年十一月、「東京日日新聞」、「大阪毎日新聞」、「文芸春秋」）の仁羽に関する分析の内、「博士」の加羅木像に迫るに当たって援用可能と思われる評言を挙げておこう。

（略）〈私〉は〈主人〉の〈善良さ〉にとりすがって、自らの錯雑を超える方途を持っている。〈私〉には、自らを救う安全弁としての〈主人〉が存在して、絶望しても希望に復帰する手段がある。この〈主人〉の造型は、〈私〉を補完する存在として〈私〉の融通性を保証しているのである。[6]

すなわち、〈主人〉や〈仁羽〉への志向は、横光自身の人間讃歌をよく表わしはするものの、同時に作品の現実性を讃歌によって相対化する極端な人間信仰をも表わすこととなり、この二面性は『紋章』に至るまで、横光の脳裡から離れなかった。[7]

「博士」における加羅木の多面性を「人間讃歌」や「人間信仰」などの単純な言葉で図式化するのは困難かも知れないが、後述する二人の婦人の相違性の問題など、博士は、「私」に取って鏡像的存在としての性質を帯びている。善悪両面

を露呈する加羅木博士は、横光利一の理論面の問題性を具現化する人物として描かれていると考えられる。「私」と共にその揺動の様を見せられる読者は、人間の「精神」というものについて考究する事を求められている。これについては、次章で明らかにする。

この様に、文理双方の存在を象徴する加羅木博士の内実にも「試験」の要素を導入する事により、作者の意図が、更に既存の学問の意味性をも問うていた事は窺える。ここまで考えを及ぼすと、「博士」一篇が包摂している問題は、極めて今日性に満ちていると言わなければならない。

Ⅲ

横光利一がこの様な小説を執筆するに至った、方法論的動機を探っておきたいと思う。同時期に書かれた評論・随筆の類で関連する箇所としては、次の様な記述がある。

例へば自然科学の基礎概念をなすものは、同時に精神科学や歴史科学に於ても同様な基礎概念となつて使用せられてゐるけれども、これらは果して相反する諸科学の中にあつても等価値を持つた概念であるのかどうかといふことに関してさへ、きわめて曖昧であり、しつかりした判定さへ誰も下してゐない有様である。殊に文学といふものは、心理学と同じく自然科学と精神科学との打ち合ふ河口のやうなところに位置するものであるから、一層これらの基礎概念の混乱するのこそ必然的な現象であると思つてゐたが、しかし、言葉を発する場合にこの混乱を恐れて避けて通れば、もうわれわれの云ふべきことは、も早や云ふべき何ほどのものもない。(8)

横光独特の学問の枠組み解釈とも言うべきものがここでは披瀝されているが、「博士」本文との多くの接続に気付かずにはいられない。横光は、引用部に先立って、「しかし、これらの知性とか感覚とか、主知とか理知とかの概念のみとは限らず、すべて基礎概念の混乱してゐること、今ほど激しいときはない」との危機感を表明している。「主知」、「理知」、「基礎概念」といった用語の弁別そのものが、「純粋小説論」を彩る言葉の数々、また、小説論そのものの解釈に似て、一定以上の難解さを感じさせる。その様な混迷を打破する手段の一つを「博士」という作品の内実に込めようとした事は十分に考えられるが、その証左の一つとして、引用部の「精神科学」の問題性が作中に発現している事を確認しておかなければならない。

先に引用した「創作は一つの精神科学であると思つている」「私」の存在以外に、作中には、回想・伝聞の形でありながら、奇妙な人物が登場する。加羅木博士に「直接逢つて実験をしてみてくれ」と依頼し、「およそ常人の人智では想像の許せぬ無羞な行為を本願として、加羅木氏を買ひに来た」女性である。この女性の存在は、博士に「科学と道徳の限界」について考える契機を与え、「人間としての行為と、科学者としての行為」との弁別の困難性を自覚させる。

この女性の造型は、言うまでもないかも知れないが、加羅木博士の人間性を試す為だけにあるのではない。作家と医師とにおける「不徳な行為」の扱いの相違を問い、更に、その正当性をも問うていると読める。ある女性が男性である博士を「買ひに来」る話と、「科学的な実験」や「学の自由」とを安易に結び付ける事自体、横光利一が頻繁に犯す論理的飛躍の一つとして批判する事は、勿論可能である。しかし、初期の「日輪」（大正十二年五月、「新小説」）などにおいて非常に悲劇的に描かれていた人間の性欲に対する懊悩が、かなり象徴的に纏められているだけでなく、それが学問間のボーダーラインを巡る省察という濾過を経て、「道徳を無視しなければ不可能な道徳の樹立」という、極めて逆説的な結論に発展している点に留目しなければならない。

今少し、このパラドックスの論理性にこだわっておこう。これは、横光作品の読者にはある種の食傷ともなっているも

のであるが、「博士」においては、小説の短さの割には、この種の記述の出現回数は多いと言わなければならない。横光作品におけるこの類の言説を有為的に位置付けようとしても、作品世界との接続も、彼の文学理論への還流も、いずれも非常に困難なのが実情である。しかし、「博士」一篇を理解するに当たっては、この問題は到底回避出来ないと考えられるので、ともあれ、当該すると思われる箇所を引用しておこう。

① いったいに、人は対面してゐる場合、尊敬されてゐるよりも自然な軽蔑をどこかでせられてゐる方が、何となく身の動きが大きくなって、心は長閑に落着くものだが、私も確かにこのときは何事をされようとも、楽しくのびのびと自由になった。これは恐らく私だけの経験ではないであらう。

② しかし、その瞬間、ふと私は、加羅木博士は私にとってはもう医者ではなく、私が反対に、加羅木患者を前にしてひそかに診断を下さうとしてゐる医師になりつつある自分を感じないわけにはいかなかった。

③ しかし皮黴科の医師である加羅木氏とっては、人々の暗面といふものは、実は生活の表面となって、逆に裏返った構造をもった奇怪な物体の世界を組み立てて連り映ってゐるのに相違ない。

④ （略）悪評ばかりの群りよって来る風評といふものは、それ自らに潜んでゐる悪辣な企てほどには、強く人を動かすものではない。殊に加羅木にあっては、悪評こそ氏の精神を不断に逞しく育て上げて来た戦場であったのだ。

①は「私」内部の発露であるが、加羅木博士との会話の後に発せられた表現である。そうすると、①から④の全てに、

加羅木博士が介在している事が分かる。加羅木の存在性は、前述の中性的立場を基底としつつ、「私」から発せられる逆説的論理を受容する装置としても機能している事が分かる。この様な逆説性は、これまで述べて来た「試験」の要素と共に、この小説の骨格を形作っているのである。

Ⅳ

更に、横光の理論面との連関を見て行こう。

つまり批評は行動と同時に哲学とならなければならない。（中略）しかし鑑賞には倫理や哲学は必要ではなくとも、批評に於ける場合とははるかに峻厳に技術への享受と検閲とを要する。この場合にはおのれを持ってはならない。そこではほとんど科学と等しい実証的な精神を持って出来得る限りおのれを空しくしなければならない。これを短く幾分奇警な云ひ方をするならば、鑑賞は自然科学であり批評は哲学であるといふべきであらう。自然科学と哲学との相違は因果を考へる場合に先づ最初おのれの立場を採るか採らないかにある。(9)

横光はここで、「批評」・「鑑賞」・「享受」の同質性と異質性を論じ、例によって彼固有の言語的晦渋を開陳する。「鑑賞と批評の限界は愛情と義務との相違」、あるいは、「批評と鑑賞との概念にもつとも激しく差の生ずるときも、自己が言葉をいふか黙つてゐるかの差に初めて生ずる」などの結論が導き出されている。

「博士」との関連をかなり匂わせつつも、加羅木由造の「私」に対する賞讃をここでの規定に当てはめようとすると、更に混迷の度は深まる。讃辞を一種の「愛情」として「鑑賞」に分類する事も出来るだろうし、「私」の著作を全て集めていた加羅木の姿勢に「対象を掘り下げその中に拡まらうとする心」を見て、「享受」とする事も可能であろう。

いずれにせよ、これらの区別の方法を実作の上で確かめようとした痕跡は、認められて良いだろう。「昨日今日」に対する悪評の嵐は、「批評」・「鑑賞」・「享受」の区別なく作者を襲うものであり、それを表象化する事で、作品はある種の強烈なアイロニーをも醸している。「私も一つの作品を読む人の頭脳によつて、こんなにも感得力が相違するものであらうかと今さらのやうに驚かざるを得なかつた」という感想は、当然、読者の批評眼を問うものであり、それは、前記三者の弁別法の審問へと接続される。そして、その審問は作者自身へも向けられているものであるという事は、言うまでもない。

「すべて美しきものを」と浪漫主義者は云ふ。しかし、現代のやうに、一人の人間が人としての眼と、個人としての眼と、その個人を見る眼と、三様の眼を持つて出現し始め、さうしてなほ且つ作者としての眼さへ持つた上に、しかもただ一途に頼んだ道徳や理智までが再び分解せられた今になつて、何が美しきものであらうか。（「純粋小説論」）

これは、「博士」執筆より一年以上後に発表された文学論ではあるが、この「純粋小説論」の基本構成となる諸概念は、かなり前から横光の内部に胚胎していたと考えられる。実際、ここで強調されている数種類の「眼」のあり方は、「博士」における「私」、加羅木、読者、そして横光自身などの存在と、いずれとも交換可能なものと受け取れる。そして、「道徳や理智」が「分解」させられているのは、正に加羅木博士の造型そのものであると言えよう。

結語

この小説は飽くまでも「私」の語りによって展開されているが、より多くの意味性を付与されているのが加羅木博士である。「私」の好印象と巷間の悪評という両面性、更には、文学と自然科学の拮抗の要素をも盛り込み、極めて複雑な人

物として造型されている。その様な人物が作中で自害に追い込まれた事は、ある意味で当然の帰結とも言える。凡そ中心人物とは位置付け難い人物に対し、あまりにも多くの問題性を賦課し過ぎたか、との感は否めない。

しかし、この作品は、その加羅木博士を含む「昨日今日」の読者と作者（「私」）という関係と、実際世界の我々読者と作者横光とを重層的に構成化し、それぞれを「試験」しようとする、極めて野心的なテクストとして読む事が出来る。

そして、その試験科目として、横光が自身の文学理論で展開した、「基礎概念」・「文学」・「自然科学」・「精神科学」などの学問領域の至当性、そして、小説読者の批評意識をも問うものがあったという事は、注視しておく必要があろう。これらの問題は、その殆ど全てが、形を変えながらも、大作「旅愁」への承継が認められるからである。

（注）

（1）金槙薫「博士」（井上謙・神谷忠孝・羽鳥徹哉編「横光利一事典」、平成十四年十月、おうふう）。

（2）「紋章」の語り手である「私」にも「松山」という名前が与えられている事は興味深い。尚、「博士」においても、「しかし、この場合の様子をいま少し読者の頭に入れて貰ふためには」という様に、僅かではあるものの、所謂〈四人称〉的語りが用いられている事は注意しておく必要があろう。

（3）野中潤「〈作品論〉の臨界点　―横光利一「機械」周辺―」（平成五年六月、「文学と教育」）。

（4）前掲（1）。

（5）井上謙は、「横光利一　評伝と研究」（平成六年十一月、おうふう）の中で、加羅木博士の造型に着眼し、「目的のために手段を選ばぬ行為や事にあたるときの異常な博士の執念には発明狂の雁金も通じる人物像として興味深い」としている。

（6）栗坪良樹「横光利一論」（平成二年二月、永田書房）。

（7）前掲（6）。

（8）横光利一「覚書一」（昭和九年四月、「文芸」）。原題は「覚書」。

（9）横光利一「覚書五（活動と帰入との限界から）」（昭和八年五月、「文学」）。原題は「活動と帰入との限界から」。

付記

横光利一作品の引用に当たっては、「定本　横光利一全集」（河出書房新社）を使用した。漢字は現行通用の字体に改め、仮名遣いは原文を尊重した。

（なかがわ　ともひろ　日本文化学）